

清代小説における公案と武俠

阿部, 泰記
山口大学 : 助教授 : 中国古典文学

<https://doi.org/10.15017/9708>

出版情報 : 中国文学論集. 19, pp.83-100, 1990-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

清代小説における公案と武俠

阿 部 泰 記

一

『施公案』『三俠五義』などの清代小説中に登場する武俠の特色について、魯迅は、民間にあつては粗暴で緑林の気風があるが、結局は大隸卒となつて使役され奔走することを光榮としている。心から臣僕となることを願っていけないことだ。

と述べ、政府に対して反乱を起こした『水滸伝』の英雄と区別している。

確かに、『施公案』では施仕倫が部下として採用した武俠はみな緑林出身者であり、こうした強盜を改心させて手先として使うという内容の公案も少なくない。

だが清代小説の中には、『水滸伝』のように、奸臣が政權を握る政府に対して反乱を起こすことを述べた作品もあり、そこに登場する英雄は決して大隸卒に甘んじてはいない。また『三俠五義』の義俠たちには、緑林の出身者は少なく、包公の指令どおりに動くことも余りない。

それに、清廉な官を主人公とする公案の場合、その性格上、清官が奸臣と戦い、武俠が清官の護衛役を務めるのは当然とも言え、『水滸伝』のように、清官が主人公たり得ない小説とは、武俠の役割もおのずと異なると考えられる。

武俠が公案に登場するのは清代小説の一特徴には違いないが、それをもってただちに清代武俠の官への屈服と見

清代小説における公案と武俠（阿部）

るのは早計である。本論では、いまだ正確に紹介されていない清代の俠義、公案小説の中の武俠について考えてみたい。

二

清代には、清官の登場しない俠義小説もあり、それは明代小説を継承したものであったようだ。

明代には『水滸伝』の版本が多く出て、個性豊かな英雄たちの描写を読者は楽しんだ。そして『水滸伝』の人気は以後も絶えることなく続き、英雄を描く作品もまた好まれた。清溪道人（明方汝浩）編次『禪真逸史』四十回もその中の一書である。

この作品は梁武帝の時代を背景にしており、主人公は、梁武帝から妙相寺副主持に封ぜられた東魏の僧林澹然である。まず前半部では、林澹然が、姦淫の戒律を犯した主持鍾守浄を諫めて、逆に謀反の企てありと讒言され、諸国に逃亡することが述べられており、その際かれを救うのが、以前かれが助けた盗賊である。盗賊苗龍・韓回春・李秀はかつて妙相寺に忍び込んだ（第四回）。苗龍は飛檐走壁の能を発揮し、一尺余の鉄釘を扉に打ち込んで、それに足を掛けて、サルのように扉を上ってゆく（こうした描写は清代小説に継承される）。三盗は林澹然にとりおさえられるが、慈悲によって赦され、改心を決意する（五回）。

その後、李秀は旅店を経営して、逃れてきた林澹然を地下室にかくまう（九回）。また苗龍は、薛志義とともに、定遠県剣山弥勒寺を寨とする山賊になっており、林澹然を迎えて兵法の教授を求める（十一回）。かくて彼らは、妙相寺に放火して鍾守浄を殺す。鍾離郡の書吏たちは、彼らを評価して、「財を奪つても人をあやめず、貧しい庶民には生活費を援助している。」「細民が富豪に欺かれて彼らに訴えると、その悪霸を殺して冤を雪いでやる。」と称える（十五回）。

次に後半部は、侯景の乱を背景に述べられ、都督の遺子杜伏威が主人公となる。彼は林澹然から兵法と変化の術を教わり、岐陽郡に祖父の遺骨を送った際には、脱獄して、収賄によって法を曲げた府丞呉恢や、権勢を悪用して

叔父杜応元を自殺に追いやった參將の子桑嘉らを斧で切り殺し（二十五回）、官軍に追われるが、宜川で山賊繆一麟の寨を拠点にして戦い、さらに乱世の雄として兵力を蓄え、延州府等の地を攻略して取り、齊朝の招安に応じる（三十六回）。

小説では、権勢によって法を曲げる奸臣や悪霸を官の力を借りずに殺戮する好漢に対して称讃し、それが盗賊であれ、高官の子弟であれ、差別をつけていない。悪の横行する世の中という前提があって、好漢の殺戮行為は是認されている。

作中、清官が登場する箇所がある（岐陽郡太守諸葛敬、二十五回）。しかし作者は、太守の父の忽然の死によって太守代行を悪府丞が務めるというすじを設定して、清官を退去させ、好漢の殺戮行為を誘いだしている。

*

そしてこの種の好漢を描く小説は、清代に至ってもなお作り続けられる。

まず最初に挙げられるのが、乾隆元年（一七三六）序刊の姑蘇如蓮居士編次『説唐演義全伝』六十八回であろう。本書はその大部分を先行する康熙刊の楮人獲編『四雪草堂重訂通俗隋唐演義』に拠っているが、相違する叙述も少なくない。書名のとおり演義ではあるが、好漢の描写に重点を置く。隋の乱世という時代設定であり、好漢には、お上に従わぬ無法者が多い。二十八回、好漢たちが瓦崗寨で隋に反旗を翻すに至るまでを見ると、北齊齊州鎮守の遺兒秦叔宝は、隋唐十六番目の好漢と称され、逆境にあつて捕吏として暮らし、街では弱い者の味方である、とその任侠ぶりが記され、実際に唐公李淵を晉王の刺客から守ったり（三回）、民女を強奪する奸臣宇文述の子を殺したり（十三回）することが述べられる。また彼の名を慕う単雄信は、隋朝十八番目の好漢で、盗賊の親玉。旅銀に窮して苦しむ叔宝を救う（五、六回）。王伯当は、武状元・文榜眼に及第した人物だが、奸臣が政権を握っているため、官を棄て天下を流浪しており（五回）、少華山の山賊となり（十回）、秦叔宝とともに長安へ上り、大暴れする。観主魏徵は吉安知府であったが、奸臣が政権を握っているのを見て、知県徐茂公とともに辞職して遊行し、潞州東岳廟に住んでいる（五回）。文帝の遺詔を草さず殺された忠臣の子伍雲召は、隋朝五番目の好漢で、復讐のために隋兵と戦って破れ、知り合った木こり崩れの太行山の山賊で隋朝四番目の好漢雄跨海（十四回）と、河北沱羅寨の山

清代小説における公案と武俠（阿部）

賊になつてゐる族弟伍天賜（十七回）とともに一旦は太行山に落ち着くが、後に河北寿州王李子通に身を投じる（十九回）。私塩を売り巡捕を殺して捕えられた乱暴者程咬金は、たきぎを売って母と暮らしていたが、長葉林の強盗尤俊達に巧妙に騙されて、ともに登州靠山王楊林の軍用金を盗む（二十、二十二回）。好漢たちは、秦母の誕生日祝いを機に知り合い、楊林に追われて瓦崗寨に籠城し、程咬金を王として国号を称える（二十三、二十八回）。

なお、『説唐』のこの部分は、咸豐十一年（一八六一）に『瓦崗寨演義全伝』二十回として梁朗川によって新たに刊行されてゐる。

*

次にやや後れて嘉慶三年（一七九八）刊の竹溪山人編『粉粧楼全伝』八十回は、唐の乾徳年間（唐にこの年号はない）という時代設定で、興唐功臣の後裔の話としており、やはり講史に分類されているが、実際には俠義小説、才子佳人小説としての性格が強い。悪丞相沈謙の子沈廷芳の獵色行為から物語は始まり、忠臣たちが山東省登州府の鶏爪山に結集して、奸臣たちの率いる官軍と戦い、終には都長安に攻め上つて、沈謙を捕えて処刑するというストーリーである。

主人公の一人である玉面虎羅焜を中心に好漢の描写を見ると、彼は越国公の次子であり、沈廷芳から祁巧雲というむすめを救つたため沈廷芳に恨まれ、さらに沈謙が子に同情して、越国公羅増が韃靼に投降したと天子に讒言したため、謀反人の家族として、官に終われる身となる。彼は逃亡の途中、鄆城県鶴島鎮に至り、黄金印という悪霸が、沈大師の門下生という関係を悪用して、大道芸人の母大虫孫翠娥を強奪しようとするのを見て、黄の毒手から守る。ここで作者は羅焜の身軽さを描写して、窓を開けてトンと一飛びで軒に上り雨どいの陰にすばやく隠れたと述べ、またその怪力を描写して、千斤余の石を持ち上げて手玉にとつたと述べている（二十二回）。この後、羅焜は、淮南の柏文連の家に着いたとき、柏の後妻侯氏の甥侯登によつて官に送られる。これは、侯登が羅焜の許婚者柏玉霜に横恋慕して企てた陰謀であつた。ここで鶏爪山の英雄たちが動き出す。鶏爪山には裴天雄ら六名の興唐功臣の後裔がいて、沈謙によつて官爵を奪われたために、ここに結集して兵馬を蓄え、復仇を考えていたのである。羅焜と知りあつた胡奎は、この英雄たちと相談して、まず守備の毛真卿夫妻を殺してその首を取り、故意に守備の

首を売りに出して投獄され、獄中で羅焜に会ってその負傷を知る。また孫彪は、守備夫人の首を名医張勇の藁簍に置いて官に捕えさせて無理やり獄中に誘って、羅焜の治療をさせる。そして処刑の当日には、好漢たちが、処刑場に乱入して、羅焜を救出する。

作者は『水滸伝』を意識してストーリーを構成しているようであり、作中には『水滸伝』を模倣した箇所が散見する。第二十九回、鶏爪山に結集した好漢たちが席次を決める場面や、三十六回、柏玉霜が瓜州で獵師王氏三兄弟の莊院に誤って泊まり、やっと逃れたかと思うと乗った船の船頭洪恩が、岸辺の王氏兄弟に向かって、せつかく捕えた衣食父母（獲物）を渡せるものかと言う場面や、四十五回、定海將軍の子で好色漢の米中粒の陰謀によって、李定が機密文書のある兵機房へ足を踏み入れ、賊として捕えられる場面等がそれである。

*

また嘉慶五年刊の『緑牡丹全伝』（一名『四望亭全伝』）六十四回は、唐の則天武后のときのこととし、奸臣の子王倫が、富戸任正千の妻賀氏と姦通したことに對する英雄たちの怒りと、狄仁傑が廬陵王を皇太子として迎えるため、英雄たちの協力を得て官軍と戦うことをテーマとする。

作中には、定興県遊擊駱龍の子弘勛と下僕の余謙という武雄に秀でた人物の外、早地嚮馬（陸の盜賊）花振芳と江河水官（河の盜賊）鮑賜安が主要人物として登場する。

花振芳は、山東六府、河南八府、直隸八府を勢力範圍とする盜賊で、妻の母大虫巴氏とその兄弟たちも武芸に秀でており、むすめ碧蓮の婿選びのためにサーカス一座を装って旅をしているし（三回）、また鮑賜安も、むすめの許婚者濮天鵬がぶらぶらしているのを見て、彼を旅に出して一人前にしようとしており（二十二回）、盜賊たちにも、一般市民と変わらぬ家庭の団欒が認められている。盜賊たちにはまた忠義心があり、鮑賜安は、任正千の冤を雪いだあと、英雄たちに向かって、「我々は好きで盜賊をやっているわけではない。廬陵王は今房州にあり、奸臣が権を擅らしているため朝廷に戻れないでいる。我々は駕を守って朝廷に送り、官職を得ようではないか。江湖にあって巨万の富を有したところで、子孫は強盜の末裔と言われるだけだ。」と、奸臣たちの政府と戦う志を述べる。

なお、この作品でも清官は主人公たり得ない。作中、山東節度使狄仁傑が羅弘勛らの裁判を担当するくだりがあ
るが(四十五回)、結局狄仁傑は裁かず、任正千が賀氏の兄で幫間の賀世頼の心臓をえぐって殺し、英雄たちは不
義密通の王倫と賀氏を生き埋めにするのである。

また本小説では、『粉粧楼』と比較すると、武闘の場面がさらに多く、三十六〜四十一回には奸臣變守礼の子鑑
万が設けた擂台(演武台)の上での好漢たちの競技が活写される。

忍びの描写もさらに入念であり、十三回には、花振芳のいでたちが次のように記されている。

換了一身夜行衣、穿青褂・青褲・青鞋・青褲包・青裹腿、両口利刀挿入裹腿裡辺、將蓮花筒・鷄鳴断魂香・火
悶子・解藥等物俱揣在懷内。扒牆索甚長、不能懷揣、纏在腰間。那扒牆索、有数丈長短、…。

*

この外、光緒刊の『聖朝鼎盛万年青』七十六回は、「清乾隆帝が微服で江南を巡遊する心を起こし、聖旨を留め
て大政を暫く大学士陳宏謀・劉墉に任せて去る。帝は、養子にした周日青を伴い高天賜と名のつて旅をし、貪官劣
紳に遇えば、自ら殺すか密旨を伝えて殺させ、危難に遭えば、英雄か神靈が救出する。」⁽³⁾という内容の、皇帝を俠
客とするユニークな小説である。

その十二回、凶悪な松江知府の子に重傷を負わせた帝を、山西巡撫の子姚森が匿い、道憲に拘禁される。このと
き水陸響馬頭領の崔子相は、飛梁走壁の能を有する少林寺門徒の頭領施良方・金標を従えて府署に忍び込み、知府
父子を殺し、姚森と帝を救出する。好漢たちは官軍に包囲されるが、そこは帝が詔勅を草して、事なきを得る。

*

また『善惡図全伝』四十回は、宋徽宗の時世、健康溲水県に住む故大司馬の子李雷が権勢を悪用して乱行を重ね、
江湖の英雄たちの怒りを招くことから話が始まり、ついには江南経路の唐端が、程春実・高奇ら英雄たちの助勢を
得て、知県臧漢に兵馬を率いさせて李雷を捕えるという内容である。作中に清官が登場しており、公案とも言えな
くはないが、清官の登場は三十五回以後であり、主要部分では、李雷を刺殺するために邸内に潜入して逆に捕えら
れ火車で焼死する金畢山(八回)等、好漢と奸臣李雷との戦いが描かれている。

以上のように、江湖の好漢たちが政治の乱れた世にあって活躍するという話は、清代においても好まれて作られ続け、小説の中の好漢たちの行動は、全く官の拘束を受けることはなかったのである。

三

だが、清代には、清官を主人公とする公案にも武俠が登場するという新しい現象が起こる。『施公案』『龍圖公案』『彭公案』等がそれである。

公案は、もともと清官が訴状・証拠をもとに事件を勘案する内容のものであり、証拠を捜す胥吏は登場しても、彼等の存在がクローズアップされることは少なかった。

明代にはこうした短篇の公案が多く編纂され、清官が、城隍廟に詣でて夢に啓示を得たり、変装して身分を隠して偵察したりして、その才智を揮って事件を解決するさまが描かれた。万暦年間には、明の于謙のことを述べた章回小説『于少保萃忠全伝』四十回が、孫高亮によって著わされ、作中に于公の断案が若干見えるが、やはりこのよ
うな内容である。

なお、成化年間に刊行された説唱詞話の中の一連の包公説話においては、包公が自ら偵察に赴いて犯人に捕えられ、という危険に遭う場面があるが、部下の捕吏に容易に救出され、その時点で犯人が捕えられるのであり、武俠の出現は見られない。

そして、清代においてもなおこのような公案は書き続けられる。嘉慶十八年刊『海公大紅袍全伝』六十回がそれである。

この作品は、明の海瑞が奸臣嚴嵩に対抗することを述べたものである。作中、海公は単なる書生ではなく、力持ちであって、応試の途中、盗人王安・張雄を捕えて改心させ、以後従者として使っており、俠義小説の影響が見られる。

だが事件の解決に当って、海公が腕力を行使するわけでもなく、また従者が海公を助けて武芸を發揮させるわけ

清代小説における公案と武俠（阿部）

でもない。海公は、十八回、淳安県令のときには、貪欲な巡按張志伯の鼻をあかすために、不当な迎送の労役を求める旗牌（伝達官）に罰棒を加え、張の面前でやおら算盤を取り出し、張の収賄の総額を示して張をひるませ、さらに張の出立の際、自ら河に入って船を引き、張を困らせる。また三十七回、歴城県令として、非道をはたらく土豪劉東雄を捕える際には、占師に扮して偵察し、逆に捕えられて水牢に閉じ込められるが、天が雷を落したため、脱出し、提督に助けを求めて、官軍の力で土豪を捕える。

このように、事件はすべて文官海公によって解決され、武俠の活躍は許されないのである。

*

次に、「施公案」の最初の版本である嘉慶三年刊『施案奇聞』九十七回も、また従来のこうした公案の性格の強い作品であるが、「海公案」とは違って、改心を勧められて従者となった緑林の好漢が、緑林出身であることを生かして、護衛としてよくはたらく。

『施案奇聞』は、清康熙年間の施世綸（小説では仕倫）を主人公にした公案である。序文には、次のように、本朝江都令施公、其為人也、峭直剛毅、不苟合、不苟取。一切故人親党有干謁、共俱正色謝絶之。江都為之語曰、「関節不到、有閻羅施老。」盖以其行比宋朝包公也。…故特採其事实数十條、表而書之。

と、施公を北宋の包拯に擬し、また、「時有好事者、以耳目所親記、即其歷官所案、為之伝其顛末」と述べる『海剛峯先生居官公案伝』の序文（明万曆三十四年）に倣って、実事を装っている。

万曆刊『百家公案』一百回および『居官公案』七十一回が、基本的には独立した短篇を編集したものであるのに対して、本小説は、複数事件を同時進行させて叙述する形式を用いており、これは、一事件が解決しないうちに他の事件が発生するという現実を反映させた新しい試みとして、注目すべきことと言えよう。ただ、別の事件が何の関連も持たずに一事件の間に割り込んで来たり、事件が提示されてから再述されるまでの間に十〜二十回ほど隔っていたり、茄子泥棒など日常の些細な犯罪を記したりしているのは、たとえ編者に実事を反映させる意図があったにせよ、作品の構成が散漫であると感じざるを得ない。

ところで、この作品の場合、武俠はすぐには登場せず、初出の「九黄・七珠案」に導かれて登場しており、清官

が主、武俠が従の公案であることを明示している。「九黄・七珠案」とは、次のような内容である。

胡秀才が、父母が殺され死体に首なしと訴える。施公は、夢に九羽の黄雀と七頭の小猪を見て、胥吏に九黄と七猪を捜索させ、その結果、九黄は飛簷走壁の能を持つ、十二人の盗賊たちと交際する悪僧、七珠は九黄と姦通する僧尼で、秀才の父母は尼僧の関係を知ったため殺されたことがわかる。施公は、一計を案じて僧尼を官署に招き、守備府の協力を得て、十二寇ともども捕える。

このように犯人は、前述の『海公大紅袍全伝』のように、施公の機智によって捕えられる。

だが事件はここで終結せず、捕えられた十二寇の仲間が登場する。それが黄天霸である。かれは、二十九回、夜中に施公の前に現れ、「我」と名のり、十二寇を釈放しなければ殺すと迫る。しかし逆に施公に説得されて退去し、さらに三十二回、酒樓で酔ったところを捕吏にとらえられ、改心して名も施忠と改め、施公の事件偵察に随行するのである。筆者には、作者が、施公を主人公とするために、故意に武俠の面目をつぶしているように思われる。黄天霸は、三十七回、悪霸関升の住む関家堡の偵察に随行した際、知県と看破されて関升に捕えられた施公を救出するために、邸内に潜入し、関升に雇用されていた緑林の仲間賀天保の助力を借りたり、六十三―六十七回、刎刑された十二寇の恨みを雪ごとく、悪虎村において施公を襲った緑林の仲間濮天雕・武天虬を殺し、その妻たちを自害させたりして、施公のために奔走する。

だが、この作品では、施公は改心した盗賊の起用を憚っており、その後、施公が昇進して上京すると（六十九回）、黄天霸は緑林に戻り、別れの際に施公に向かって、「心を砕いてご主人に仕えましたが、遂にお心を動かさせませんでした。ご主人が天霸を用いようとなさらないのは、投降の道を塞いで後継を防ごうというおつもりなのでしょう。」と恨みを述べる。そして、黄天霸はこの後施公の前から姿を消す。彼が再び姿を現すのは、『続集』百十七回においてである。

なお、八十二回には、黄天霸に代わって盗人関小西が登場し、順天府尹施公の従者となる。彼は高山寺に忍び入って、悪僧に殺されようとする八旗都統の子巴州布を救出したことを施公に訴え、施公は官兵とともに悪僧をとらえる。

『施案奇聞』では、このように武俠の活躍を極力抑えており、公案の中に武俠が参加権を得た最初の段階を表わした作品だと言えよう。

ついでながら、テキストは未整理の状態のまま刊行されたようであり、「類臧鳴冤」「啞巴喊冤」「告土地案」等の話は事件だけに提示されて、その解決はかなり先に送られるという非計画的な叙事が行われたり、回目と内容が一致しなかったり、一回が一〜三葉（約五百〜千五百字）と短く、文章にのびがなかったりする。また全九十七回ではあるが、第八十九回冒頭に施公を称える七言律詩を置き、事件も新たにここから始まるのに対し、九十七回は「鯉魚化僧案」の途中であるところにも、テキスト刊行の非計画性を見ることができるといえる。

*

『施公案』とは逆に、武俠の力を最大に發揮させた公案が、『龍圖公案』である。

『龍圖公案』又は『包公案』は、道光年間に説書人石玉崑によって北京で語られた。¹今、「石韻全本」と呼ばれるその流派のテキストの抄本が伝わっており、その「南清官慶寿」に、石玉崑が語り手と同時の人であることを、次のように述べている。

時字是了不得的。就拿玉崑石三爺他説罷。怎麼就該説不過他、他如今是不出来咧。他到那個書館兒、一天止説三回書、就串好了幾中吊錢、如今名動九城、誰不知道石三爺呢。我如今説書一天纔不過一兩吊錢、這岔到那兒去咧。

このいわゆる「石派書」は韻文と散文の混淆体であるが、韻散混淆体の原本を散文だけの小説に整理しなおしたものが『龍圖耳録』百二十回である。⁶

石派書と『龍圖耳録』を比較すると、処々に大小の相違点を発見する。その中、大きな相違を二三挙げると、次のごとくである。

一、石韻全本「小包村」では、春試に上京する包公は、方懐集で一道人が武生に会うのを見る。

（話者がここで、道人は悪僧が金龍寺を占拠したため自害しようとするのを武生に助けられた、と説明する。）道人は武生から銀子を受取って去る。包公はこの後、金龍寺に泊まるが、悪僧たちが女と酒を飲んでいるのを従者包興が見たため、

主従は捕えられ、武生に救出される。これに対して『龍図耳録』三回では、「方懐集」が「ある鎮」、「悪僧たちが女と酒を飲んでゐる」が「女がいる」である外、読者への説明を末尾に置き、事件の真相を最後まで読者に伏せている。

二、「小包村」では、集賢村の李文業のむすめにとりついた妖怪をはらう法師が求められていると包興が知って、一方的に李家の執事に包公を推薦し、包公もしぶしぶ従うとするが、『龍図耳録』では、包興があらかじめ李家の執事に、包公は妖怪を捉えられないと言うであらうがそれはうそなので、しっかり説得しなければならぬと吹き込むとし、ここに次のような滑稽な場面を設定して、ストーリーを盛り上げている。

包公道、「管家休聽我那小佃之言。我是不会捉妖的。」包興一傍挿言道、「你聽見了，說出『不会』来了。快磕頭罷。」：包興又道、「相公、你看。他一片至誠、怪可憐的。没奈何。相公、慈悲慈悲罷。那不是功德呢。」包公聞聽、只氣得面紅過耳。

三、「小包村」には、「後來包山只有三個子。長子包世恩、次子包世頭、三子包世榮。下文書、包文公開封府劉姪、因包世榮所起。」と述べ、後に包公が甥を処刑することを預め明らかにしているが、『龍図耳録』四十六回以後では、これをにせ公子の犯行として包家の品格を損なうことを回避している。

よって、石派書が石玉崑の原本と近いものと想定すると、『龍図耳録』は石玉崑の原本にかなり改訂を加えて、知的で上品な作品に仕上げていると言える。

なお、この『龍図耳録』の後に出了た最初の版本が『忠烈俠義伝』（一名『三俠五義』）であるが、このテキストには、粗略な部分も散見し、必ずしも良いテキストとは言えない。⁸⁾

ところでこの作品における主人公について考えると、『龍図耳録』の序文では、「所有伝中三俠五義許多豪傑、非包公特識薦拔、却也不能頭達、就是包公忠肝義胆赤心為国、若非衆英雄竭力輔助、也是辦理不来的。」⁹⁾と云って、包公とともに武俠たちの役割を欠くべからざるものとし、『忠烈俠義伝』序文では、「極讚忠烈之臣、俠義之士。且其中烈婦烈女義僕義環以及吏役平民僧俗人等不可枚舉、故取伝名曰忠烈俠義四字。」¹⁰⁾と云って、さらに広範囲の俠義に対して讚美していることからして、すでに清官包拯一人ではないことがわかるが、また作品の構成を見ても、

一〇十九回は、「抱粧盒」「包待制出身」「断烏盆」「陳州糶米」「仁宗認母」等の故事を中心に編集した話であるが、二十〇五十六回は、包拯故事を離れて、南侠と白玉堂の二侠客を中心とする話になり、五十七回以後は、総管馬朝賢の甥馬強の専横と襄陽王の謀反をめぐって、北侠、艾虎、白玉堂、蔣平らが活躍する話に発展しており、清官包公は、官署から離れず、偵察等の重大な役割をすべて武俠たちに委任して、次第に主人公の地位を退いていることが明白である。

更に、具体的に武俠の描写を包公の描写と比較してみると、三回に登場する武生（武官試験の受験候補生）展昭は、石韻「小包村」では亡父が刺史であるとし、秀才包公と意気投合して別れた後、金龍寺を偵察し、捕えられた包公と包興を救出する。彼は百宝囊から如意縑をさぐり出して、包公の腰に繋ぎ、一跳びで塀に上り、塀に股がって包公を引き上げ、塀の向こうに下ろす。その後、包興を助け出し、たちまち姿を隠す。展昭はこの後、六回に、土龍崗で王朝・馬漢・張龍・趙虎四賊に捕えられた定遠県令包公の前に現れて助け、十二回に、陳州で安樂侯龐坤の邸に忍び込む。彼は如意縑を塀にかけて登り、石を投げて塀下の様子をさぐって下りる。彼は媚薬酒をすりかえたり、香灰をふりまいたりして奸臣らを翻弄し、また龐坤が刺客項福を用いて包公の暗殺を企てていることも知る。さらに十三回、苗家集にて、項福が失敗した場合の逃亡計画を龐坤らが立てていることも聞き、包公に置き手紙を残して知らせ、項福・龐坤を捕えさせる。その後、二十回には、三宝荘で、通真觀の道士が龐太師の委嘱を受けて、祈禱で包公を殺そうとしていることを聞き、道士を殺す。そして二十二回、御前で武芸を披露して「御猫」と呼ばれ、御前四品帯刀護衛に封ぜられる。二十八回、休暇を取った彼は杭州へ遊び、そこで茶樓の主人を救って養子夫妻を懲らしめた後、三十一回、武生双俠丁兆蕙に従って松江菜花村に遊んで丁月華と婚約する。

同じく武生の白玉堂は、十三回、安平鎮で高利貸の苗秀が細民に課した不当な負債を肩代わりし、苗家集でその金を取り戻した後、しばらく出現しないが、三十三回以後、金懋叔という仮名を使って、秀才顔查散と同行して上京し、三十八回、吝嗇な岳父柳洪とその妻の甥馮衡によって殺人の冤罪を被った顔查散を助けるため、開封府に「顔查散冤」と書いた紙を投げ込んだり、三十九回、「御猫」展昭に屋上で鬭いをいどんだり、四十一回、陳林の毒殺を図る郭槐の甥郭安を殺して冠承御祠に詩を題したり、五十一回、開封府から照妖鏡・古今盆・遊仙枕の三宝

を盗んでライバルの展昭を陥空島へ誘いだしたりして、俠客としての手腕を披露する。

このようにこの作品を代表する武俠は、武官登用試験の候補生であつて、緑林出身者ではなく、彼らは自らの俠気によって諸国を遍歴して諸悪を撲滅するのであつて、決して包公の配下に属する野望があつてのことではない。この作品では、武俠は清官を超越し、事件が発生する前に知つて、逆に清官に犯人を知らせる、俠客らしい人物として描かれ、朝廷がいかにして、武芸卓絶した彼らを臣下にできるか苦慮することが述べられている。

これに対して包公はどうか。五回、包公は、定遠県令として木匠殺僧案・扇墜姦殺案・烏盆案を解決した後、罷免されるが、仁宗の夢に現れて招請され、玉宸宮の冠承御の霊を裁いて開封府尹に任命される。ここまでは彼は面目を十分施している。しかし、七回、七里村の尸龜殺夫案では、包公は死者の妻の詭弁を看破するが、犯罪を立証するための証拠を収集するのは包公ではなく、新しく幕客になつた公孫策である。公孫策が医者に扮して偵察し、証人尤狗児を捜し出すのに対して、包公は連行されてきた尤狗児に冤魂の話をしておどし、姦通殺人の真犯人を問ひ質すだけである。また、八回、安樂侯龐坤の配下の鉄仙觀の道士が、陳州における龐坤の悪行を開封府に訴えるため上京した良民を凡鐘下に閉じ込めていたことが発覚するが、この事件を発見するのも包公ではなく、公孫策と彼が知り合つた土龍崗の四賊である。四賊はこれ以後、開封府の胥吏となり、事件の捜査に従事する。なお盜賊を罷めて吏となることは、『施公案』にすでに見えていたとおりである。

かくて包公は、専ら官署において事件の審判を担当し、捜査は優秀な胥吏が担当することとなる。このように、『龍耳録』では、包公は捜査にタッチせず、したがつて施公のような中心人物ではあり得ないのである。

もともとこの作品では、登場人物のそれぞれに面目を与えようとしており、たとえば従者包興が世間知らずで融通のきかない秀才包公を助けて上京した際の描写は、すでに述べた如くであるし、劉妃・郭槐の魔手から幼い仁宗を護つた冠承御、身をもって李妃を冷宮から救出した宦官余忠、金龍寺から身一つで脱出した包公主従に豆腐を恵んだ孟老、宦官郭槐を包公に審判させるための密詔を郭槐自身に開封府へ届けさせた仁宗、秀才顔查散に随行して、たかり客臭い金懋叔と応酬する従者雨墨等の描写は、特に出色である。その意味では、この作品は、他作品の追従し得ない特色を持った文学作品として評価できよう。

しかしながら作品全体を通して見た場合、描写の重点は明らかに俠客に偏っており、公案というより、俠義小説という方がふさわしい。

*

光緒十九年刊『彭公案』百二十回は、清康熙年間の彭朋をモデルとし、『施公案』のように、清官が悪霸を偵察するというタイプの公案である。だがこの作品では、英雄たちは、『施公案』の黃天霸のように、清官に頭を押さえつけられることはなく、「三俠五義」のように奔放に行動する。

ストーリーは、彭公の三河県令赴任から始まり、廟会で婦人をからかう悪棍をたしなめて、彭公の身に危険が及んだとき、緑林の好漢の李七侯に助けられることが述べられる(二回)。だが李七侯がそのまま彭公に仕えるわけではない。彭公が占師に扮して悪霸李八侯を偵察して逆に捕えられたとき、救出したのは官軍であり(五回)、李七侯ではない。彭公は李八侯の裁判の際、李七侯に出頭を命じ、捕吏になるよう勧めるが、李七侯は緑林の朋輩の怒りを買うことを恐れて辞退し、後になって彭公の従者となるのである。ここまで見る限りでは、『施案奇聞』と同じく、清官が主人公であるかに見える。しかし、この作品では、好漢たちは必ずしも官に属さず、大胆な行動を展開する。

すなわち、二十〜二十四回、光棍左奎を逮捕したために悪官僚から弾劾された彭公を復職させるため、李七侯ら緑林の人物が斡旋料一万両を作って中央官僚に贈ることが述べられて以後、『龍岡耳録』のように、武俠の絶妙な手腕の描写が主たるテーマとなる。三十七回、驚天動地の事を成しとげたいと考える黃三太は、虎を射殺して康熙帝に謁見し、義賊だと表明して、黃馬褂を賜る。三十九回、これを聞いた楊香武は、負けてならじと、禁中に忍び込み、康熙帝と宦官たちの虚をついてその目前から九龍玉杯を堂々と盗み出す。四十一回、紹興府尹彭朋は李七侯に諮って黃三太を北京に護送し、康熙帝は黃三太に九龍玉杯を捜させる。この時、九龍玉杯は揚州避俠荘の悪霸周応龍の手に渡っており、四十四回、楊香武は周妻の死体を投げて注意を逸し、うまうまと玉杯を奪還する。そして武俠と周応龍との戦いが、次に展開する。五十二回、汴梁城外の元通観では、周の仲間が悪道士馬道玄が、河南巡撫として赴任する彭公を襲うが、出迎えの守備彭雲龍によって救われ、五十六回、五里屯の悪監生張耀麟を偵察し

た彭公は、変装を看破されて捕えられる。張は周応龍や開封府尹武奎と仲間であった。ここに武俠張耀宗と歐陽徳が出現し、盜賊たちと戦う。だがその間に彭公は連窪莊の悪霸達に囚われ、康熙帝下賜の金牌を奪われる（六十二回）。そしてこれ以後、金牌を奪還するために、歐陽徳らが周応龍を偵察し、七十三回、結局周は英雄たちと官兵によつて捕えられ、寒泉穴の水底に隠された金牌もついに尋し出される。かくて張耀宗らには武官職が約束される。

以上のように、この作品は『施公案』のように清官が犯罪者を偵察するタイプの公案であり、登場する武俠も多く緑林出身者であるが、李七侯のように彭公の従者として甘んじる者ばかりでなく、黄三太や楊香武のように、武芸や忍びの手腕を披露する武俠が出現し、また武俠と盜賊との闘争の場面が多く、描写の重点は、彭公から武俠へ移っている。

*

だが、光緒年間に特に武俠が清官を凌ぐ作品ばかりが書かれたわけではない。唐の狄仁杰の断案を描いた『武則天四大奇案』六十四回の中では、武俠は従者としてのみその役割を果たすのであり、主人公は常に狄公である。

昌平県令狄仁傑には四名の従者があり、喬泰・馬榮は緑林の豪客で、狄公に説得されて改心した者である。洪亮は武芸はないが胆力・智力に勝れた者、陶干も江湖の朋友で改心して差役となり、後に狄公の配下に投じた者である。作品は清官主導型の公案であり、彼らは狄公の指示に従つて犯人を偵察し、決して奔放な行動をしないし、活躍の場面も多くはない。

ただ事件の中には、緑林出身者の彼らの協力なしには解決しないものもあり、最初の高家窪殺人事件では、十四回、容疑者の湖州客人趙万全を馬榮が捕えかねている際に、双方の知人で緑林中の朋友の蔣忠が出現して仲を持ち、十八回、趙が真犯人邵礼懐との交誼を棄て、邵を欺いて馬榮らとともに捕えるし、また皇華鎮の姦通殺夫案では、二十四回、馬榮が盜賊に扮して壁隣の容疑者の徐家に忍び込み、徐家の寢室の床下に空洞があることを発見して、事件を解決に導く。さらに、奸臣武承嗣と許敬宗が、太行山の盜賊李飛雄を用いて、廬陵王の反乱を装った際には、五十八回、馬榮がもと李飛雄と仲間であったことを利用して潜入し、官軍に内応して李を捕える。

清代小説における公案と武俠（阿部）

*

また『林文忠公全伝』（林公案）六十回も、清の林則除を主人公とする清官主導型の公案である。この作品の成立時期は明らかではないが、作中に「偵探」「歴史」等の語が見えることから、「狄公案」より後出の近代の作とわかる。

林則除の拳人時代から湖広總督までのできごとを述べ、特に作品前半部には、林公に随行して護衛・偵察する武俠の活躍が描かれる。だが、『狄公案』とは違って、作中の武俠に緑林出身者は少ない¹⁰⁾。これは、三回、賑災金を納めて知府の職を得た海賊が窃盗したり、同じく海賊出身者の副將張保が、奸臣穆彰阿によって廈門総兵に推薦されるが、御史林公の上奏によって仲間の剿捕を命じられたため、林公の暗殺を企てたりすることが述べられることからして、緑林出身者が信頼できないためだと思われる。

作中、武俠として登場する人物は、少林拳の能者周保緒とその妻紅娥、武拳頼恩爵とその師張幼徳（少林愈派）、周培・裴雄・趙猛・楊彪・独目僧、紅娥の婢燕兒、史大娘とその子史林恩、湖州糧船幫頭の王安福、安襄鄖道署員陳錦堂とその妾鳳姑であり、周保緒と紅娥は、張保仔の指令に従って林公を暗殺しようとする馬賊商峻・毛四や部將李彪を敗り（五、六回）、頼恩爵と張幼徳、周培らは、蘇州の惡霸頼英・葛大力の逮捕に手腕を奮い（九、十三回）、史大娘は、盜賊に林公から盗んだ金を返還させ（十四回）、張幼徳は、夫子謀殺事件の真犯人をつきとめ（十五回）、張幼徳と王錫朋、李廷玉は、逃亡していた葛大力の部下裘獅を捕え（十六回）、燕兒は、張保仔の放った刺客を撃退し（十八回）、史林恩は、張保仔にさらわれた林公を救出し（二十二回）、王安福と林恩は、殺人犯の水手閩大漢、王富貴、倪啓祥、馬九を次々に偵察・逮捕し（二十六、三十一回）、陳錦堂と鳳姑は、鴉片の密売人朱連升を追跡する（四十一、四十三回）。

なお、これら武俠以外に、名捕吏の活躍も描かれ、閩清県の童順は、窃盜犯の漳州府尹を負傷させて動かぬ証拠とし（三回）、清河県の施順は、周保緒の命令に従って、塩密売人らを誕生会に誘い出し（八回）、帰徳府の彭升は、別件逮捕の小盜から堤防藥の放火犯であるという自供を取り（二十回）、兗州府の金順全は、盜賊の首領たちに尋ねまわって、林公が張保仔にさらわれたことをつきとめる（二十二回）。

彼ら武俠や捕吏たちは、盜賊の事情に通じており、盜賊の逮捕に力を發揮するのである。そして林公は彼らの頂点にいて指令を下すのであり、決して『龍圖耳録』や『彭公案』のように、清官不在の中に武俠が事件を解決したり、逆に事件を引き起こしたりすることはない。なお後半部では、鴉片禁止をめぐって、英国領事義律と果敢に応酬する林公が主として描かれており、その主人公としての地位を強固にしている。

本小説には、亡霊は登場せず、また鴉片戦争という社会記事に取材しているところに、近代小説らしさがうかがえる。しかし他方では、『彭公案』を模倣する（八〜十回）など、保守性も留めている。

四

以上のように、清代小説において、俠客の描かれ方はさまざまであり、決して盜賊出身で清官の従者となることを光榮とする者ばかりではない。またそうでなければ、清代小説には何の魅力もない、ということになる。公案は、清官を主人公とすべき種類の小説であるから、話は別である。ここでは、武俠に何の役割も与えないこともあるし、清官の従者とすることもあろう。ただそういう公案においてすら俠客が清官を凌ぐ地位を占めることがあるというのは、英雄談がいかにか好まれたかを物語っている。講史においても然りである。従来、講史と俠義は別に論じられてきたが、清代小説においては、講史に俠客が登場し俠義小説としての性格を強める。そこに登場する俠客は、武臣の子であったり、盜賊であったりするが、いずれも奔放に行動する。彼らは単に過去の時代の人物であるのではなく、清代の俠客の性格を間接的に反映していると考えてよからう。清代の俠義物『万年青』に至っては言うまでもない。彼ら英雄たちは、『水滸伝』の英雄たちと同じく、無法には無法をもって対決しており、そこに英雄としての面目が見られるのである。公案に俠義が結びついたという形象面だけを見て、清代小説の義俠を「封建統治階級のために力を出す奴才」と厳しく批判する説があるが、もし批判をするならば、招安を受け入れ朝廷のために盜寇征伐に赴いた梁山泊の好漢たちと、清代小説の義俠と、どこが異なるかを明白にした上でなければなるまい。

注

- (1) 魯迅『中国小説史略』(一九二三)第二十七篇「清之俠義小説及公案」。なお『中国小説の歴史的変遷』(一九二五)第六講では、『水滸』の豪傑が政府に反抗するのに対し、俠義小説の英雄は政府を援助する、とも言う。
- (2) 柳存仁『倫敦所見中国小説書目提要』(香港龍門書店、一九六七)参照。
- (3) 『乾隆巡幸江南記』(上海古籍出版社、一九八九)、顧鳴塘「前言」より。
- (4) 清富察貴慶(乾隆四十年頃生、道光十七年以后卒)『知了義齋詩鈔』「石玉崑」小序、「石生玉崑、工柳敬亭之技、有盛名者近二十年」から、石玉崑は道光年間に活躍した人と言われる。胡士瑩『話本小説概論』(中華書局、一九八〇)参照。
- (5) 傅惜華『北京伝統曲芸總録』巻六「石派書総目」には、中央研究院歴史語言研究所旧藏抄本を挙げ、すべて毀滅したと言う。今、「救主盤盒打御」「小包村」「鏢龐坤」「天齊廟断后」「南清宮慶寿」「三審郭槐」が日本に存する。
- (6) 『龍凶耳録』(上海古籍出版社、一九八〇)は、謝藍齋抄本を排印したもの。
- (7) また、『包公鏢姪』『鏢包冕』は清代説書に見え、『鏢包勉』は道光四年(一八二四)「慶升平班戯目」に見える。なお、この故事の起源は古く、宋『五朝名臣言行録』巻八引『記聞』に「有從舅犯法、希仁撻之」とあることから発して、明万曆刊『百家公案』八十二回には、財を貪った妻子包秀を包拯が弾劾するとあり、現代の豫劇『鏢包勉』も、包拯が包勉を貪官として誤って処刑することを演じている。
- (8) 李家瑞「從石玉崑的龍凶公案説到三俠五義」(『文学季刊』二期、一九三四原載、王秋桂編「李家瑞先生通俗文学論文集」一九八二所収)に指摘する。
- (9) 本稿、九三頁。
- (10) 緑林の人物が全く排除されるわけではない。狄公は、八回、水賊方老哥子を把総に推薦し、二十三回、嚮馬張進に武職を約束している。ただ彼らはその後、再登場して活躍しているわけではない。
- (11) 北京大学中文系一九五五級編『中国小説史稿』(北京人民文学出版社、一九六〇)、四七九頁。劉世徳・鄧紹基「清代公案小説的思想傾向」(『文学評論』一九六四・二収)も、同趣旨のことを述べる。